

# 瓦からみた7世紀の日羅関係 についての予察

Elucidating the Relationship between Japan and Silla  
in the 7th Century from Roof Tiles

高田貫太

TAKATA Kanta

はじめに

- ① 卑上り瓦窯跡4号窯の瓦
- ② 飛鳥寺禅院の瓦
- ③ 本薬師寺と慶州四天王寺

おわりに

## 【論文要旨】

天智8年(669)の遣唐使派遣以降、大宝2年(702)に至るまでの30年間あまり、遣唐使は一度も派遣されていない。その間、日本(倭)が新羅との活発な交渉を通して先進文化や諸制度を摂取した状況が古代史学の側で指摘されている。7世紀における日羅関係の動態を考古学的な観点から検討していく必要もあろう。その予察として、飛鳥・藤原地域の寺院出土瓦をいくつか取り上げ、その系譜関係を追究することで、当時の日羅関係の一端を浮き彫りにしたい。

宇治市卑上り瓦窯跡4号窯に伴う軒丸瓦は飛鳥の豊浦寺に供給される。これまでA型式は「高句麗系」、E型式は「百済系」と考えられてきた。ただ、それぞれの製作技法の差異性と共通性、そして朝鮮半島における類例を検討すると、むしろ新羅から渡ってきた異なる技術伝統を有する二組の工人達によって製作された可能性も考えられる。

白雉4年(653)5月に学問僧として唐への留学を果たした道昭は、帰国後に飛鳥寺の東南隅に禅院を建てる。その所用軒丸瓦(5つの型式)はそれぞれ独自性が高く、系譜をたどると新羅、百済、そして中国南朝に系譜が追え、相対的に新羅的要素が色濃く認められる。また丸瓦部に朝鮮半島系の竹状模骨丸瓦を用いている点も特徴的である。

近年、慶州四天王寺の発掘調査が進展している。その成果と本薬師寺の調査成果を比較すると、双塔式伽藍配置という共通性のみならず、裳階、または裳階用軒瓦に関する共通点も垣間見える。

7世紀の瓦資料からみると、日本(倭)と新羅は継続的に7世紀を通して交流を重ねていたことがうかがえる。その背景として、朝鮮三国の抗争の中で、折を見て倭との提携を模索する新羅の姿を認めることは許されよう。日本における律令国家の成立・展開において、新羅との交流ルートも一つの基軸であったと推定できる。

【キーワード】 日朝関係史、7世紀、新羅と倭(日本)、朝鮮系瓦、遣唐使